

『ロレンツ・サラディン 山の生涯』

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハ

解説 ロベルト・シュタイナー

翻訳 平井吉夫

ハン・テングリのドラマ

ふたつの物語、ひとつの本

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハとロレンツ・サラディン

二〇〇五年八月二二日、ハン・テングリ、中央アジア。晩になり、太陽はカザフスタンの灰褐色のステップの暗い光のなかに沈む。われわれは頂上から六〇メートル下にいるが、今日はこれ以上進めないだろう。最高点にも、西稜越しに下山するつもり反対側にも。一四時間前から立ちっぱなしで、頂上へ向かうには力を出し尽くした。強風が数時間前から激しくなり、雪片が舞い上がる。夜に入って気温はマイナス二五度まで下がる。身を寄せ合ってくぼみに入ると、風音がすこしは弱くなる。護るように顔を被った両手の隙間からのぞく無言のまなざしは、これ以上動いても意味がないと語っている。すでに霧が頂上にかかっている。雪が降りはじめ、こちらに吹きつけては、荒れ狂う風に吹き払われる。白い波頭のような固く締まった雪の吹きだまりの間に、ヴォロージャとアレクサンドルが風に激しくひるがえるテントのシートを押さえつけ、アレクセイと私は二本のアイスクリュウとピッケルで固定する。やっと中に這いこむことができる。息の蒸気につつまれて、われわれはルックザックの上でひとかたまりになり、窮屈にコッヘルをかこみ、雪を溶かし、踊る青い炎を見つめる。夜中もまわりの風は猛犬のように吼えまくる。われわれは肩でテントを支える。だれひとり眠らない。

ときどき話をする。ゆっくり、ぼつりぼつりと。今夜ロシアの友人たちが語ってくれるのは、人間がハン・テングリに初めて登ろうとしたときの話だ。天山のまんなかに聳える、あの均斉のとれた秀麗な山。初めて私はアバラーコフ兄弟の遠征のことを聞き、初めてロレンツ・サラディン、あの注目すべきスイス人のことを聞く。われわれより三〇メートル上の、斜めにぱっくり分かれた二つの大理石の岩の間に、アバラーコフ、グートマン、ダディオモフ、サラディンは、あの寒い一九三六年九月五日、登頂後の休息の場を見だし、いま、その岩のまわりで絶叫する風の音を聞きながら、私はサラディンの生涯の地平、彼の活動、彼の足跡の探索をはじめることになる。

一五年あまり私はヨーロッパ各地の山を登り続けているのに、サラディンの名を聞いたことがなかった。どんな人間だったのだろう、西欧よりもロシアでその業績が多くの人々に知られているスイス人は？　どんな登山家だったのだろう、スターリン時代に個人ツーリストとしてソビエト連邦の山に登ることのできた男は？　たった一人でロシアの最も著名な登山家グループと親交を結んだ人物は？　この尋常ならざるスポーツマンにして旅行家の魂は、なにを反映していたのだろう？　その人物をわれわれが知るよすがは、一定数の写真、山岳雑誌の記事、いくつかのメモしかない。アンネマリー・シュヴァルツェンバッハがサラディンに魅了されるきっかけになったのも、おそらく同じような問いかけだったのではないか。

追跡

一九三六年のハン・テングリにおけるドラマティックなできごとは、登山家に多くの問いを投げかけている。シュヴァルツェンバッハが事実を描写するために入手できた情報はごくわずかなものだった。民族学や地誌学にかんする記述とちがい、彼女には登山について信頼できる本を書けるほどの経験も、知識や想像力も欠けていた。そのためモスクワでの調査のさいに他の遠征隊員から聞いたことに依拠するしかなかった。サラディンの伝記のフィナーレとなるハン・テングリ登山にかんする記録が、他のできごとにくらべ比較的短いのも不思議ではない。

これからわれわれは、シュヴァルツェンバッハの丹念な調査にもかかわらず残された隙間を、その後の知見によって埋めようと思う。サラディンからは遠征の本来の経緯にかんするメモを得られない。基本資料としては三回のハン・テングリ遠征の体験のほか、ユーリー・ポポフが書いたアバラコフ兄弟の伝記『全人生の山』と、エフゲーニー・アバラコフの自伝『ソビエト連邦の最高峰へ』がある。ヴィタリ・アバラコフからも遠征の記述が得られる。このテーマから彼は離れることができなかったようで、一九八〇年代に行われた最後のインタビューでもハン・テングリでの体験を語っている。

私が調査をはじめたころ、ロシアのアルピニズムにおよぼしたサラディンの影響の悲劇的なひろがり、まだ見過ごされていなかった。緊張と悲哀をもって、われわれは彼の足跡を、ソ連の秘密情報機関と強制収容所のアーカイブまで追うことになる。

ソビエト連邦におけるアルピニズム

サラディンがアバラコフ兄弟とミハイル・ダディオモフと知り合ったのは、一九三五年のパミール学術遠征のときだった。仲介したのは一九三五年のスイスのカフカス遠征に通訳として同行したゲオルギー・ハルランピエフだった。ハルランピエフはモスクワの登山界の中心的人物で、だれもが知っていた。サラディンはこの二四歳の音楽家とすぐ親しくなり、その家に何度も宿泊した。ハルランピエフのライフスタイルもサラディンに感銘

をあたえたにちがいない。才能あるフルート奏者として彼は晩になるとコンサートに出向き、母親ときょうだいを養うに足る金を稼いでいた。昼間はずっと音楽の勉強にいそしんだ。その情熱は、サラディンと同じく、アルピニズムにも向けられた。彼はしばしばカフカスやパミールにおもむき、初登を重ねた。労働組合のスポーツ連盟で彼はアルピニズム部門の重要な位置を占めていた。ハルランピエフは流暢にドイツ語を話すので、サラディンとのコミュニケーションを容易にした。サラディンのほうは、アバラーコフの遠征報告の数箇所からも推測できるように、ロシア語はわずかな片言しか話せず、ロシアの山仲間との会話はほとんど英語だった。

サラディンがハルランピエフを通してロシア最強の登山家グループと近づきになったことを、一九三七年時点でのアンネマリー・シュヴァルツェンバッハはまだ知らなかった。ロシアのアルピニズムは当時はまだ若かった。一九世紀にイギリスの貴族たちがスイスに旅行し、地元のガイドに助けられて多くの未踏の四〇〇〇メートル峰に登頂していたころ、ロシアではパミールと天山の高峰に興味を抱くものはほとんどいなかった。一九一七年の革命以前、登山は、とくに一般人にとって、未知のものと言ってよかった。山に踏み入るのはごくわずかな人々で、たいていは研究目的の探検家だった。たとえばロシア人のピョートル・ペトロヴィッチ・セミョーノフやドイツ人のゴットフリート・メルツバッハーなど。かれらは何年もの旅行のために莫大な費用を投じ、中央アジアの人里離れた山岳地帯に入っていた。

一九三〇年からめざましい発展がはじまった。登山が大衆スポーツになり、一九三五年だけでも二千人以上がエルブルス、地質学的に見てヨーロッパの土地の最高峰に登っている。一九三六年には二万人以上が登山のために新設された三〇箇所の国営「登山センター」に登録している。ちなみに山岳関係のプレスも生まれている。たとえば旅行と登山の雑誌『*Na susche i na more* (乾燥地と海にて)』や、技術問題を集成したセメノフスキーのハンドブック『アルピニズム』など。この時代の登山者は貴族や莫大な費用をかける探検家ではなく、とくに学生が多いが、ふつうの労働者もまじっていた。

これほど短期間に、これほど多くの人々が、なぜ山に熱中することができたのか？ その答えは政治にある。ソビエト連邦政府から登頂がシステムティックに支援された。山岳ツーリズムは国家的文化の一部として財政的に助成され、登山は助成に価するスポーツ種としてスポーツ省に受け入れられた。プロレタリア・スポーツ組織の上部団体、もしくは労働組合の傘下に、登山セクションがいたところに簇生する。のちには賞や表彰が登山競技の枠内で授けられた。だが、なぜソビエト政府はこれほど多大な関心を登山に寄せたのか？

ひとつには、ソ連の登山家は国土獲得の一助になったからだ。現実の土地だけでなく、「メンタル・マップ」においても。無人地帯においてはロシアの登山家のプレゼンスは国家のプレゼンスを意味したから。登山家は遅まきのコロニアリストだった。かれらは地域を探究し、地質学者の資源探索や土地測量を助け、モスクワの思想的所産を人里離れた辺

境に運んだ。山、峠、氷河に付けられた名前が、この政治と登山の関連を表わしている。かつては地図の空白地帯だったところに、「プロレタリア・ツーリスト氷河」、「赤軍峠」、「戦時測量技師峰」、「レーニン峰」、「スターリン峰」が出現する。ソ連の比喩的言語にとっても登山は重要だった。目標への道として、成功への興隆として。たとえばレーニンは一九二二年に書いた『高峰登山論』で十月革命を登山になぞらえた。

いまひとつは、政府がアルピニズムを人間教育の手段とみなしたからだ。チーム力、相互扶助、連帯、悪条件に屈しない敢闘精神など、古典的な登山者の美德は、人間に典型的な社会主義的特性を教えるものとされた。あらゆる階層の社会的団結、共通の目的にたいする個人の従属、集団のための私有財産の提供、集団主義、身体の強健、等々。またスポーツ活動は飲酒癖と暴力行為を予防するものとされた。とりわけアルピニズムは、ナチス独裁下でもそうだったが、戦争への鍛錬と準備に適しているものとされた。目に見える例として、大きな祝典での登山者の軍隊式パレードがある。

ソビエト政府の国家助成は一九九一年まで続いた。たとえば登山指導者は一九三六年から変わらない法律によって、三ヶ月の無給休暇を保証された。どこで働いてしようと。かれらはその期間を「登山センター」で過ごし、指導のかたわら初登を試みることもできた。そういう「国際登山者センター」のひとつがハン・テングリの麓にあった。文化面でも登山はしばしば題材になった。ロシアの最も著名なアーティストの一人、歌手のウラディミール・ヴィソツキーはみずからもアルピニストで、多くの山の歌をつくり、今日でもソ連時代に育った者はだれでも唱える。

ロシア登山家のエリートとともに

サラディンがロシア人とコンタクトをとったとき、知り合ったアバラーコフ兄弟がどういう人間なのか、まだ知らなかった。今日までアバラーコフの名はロシアの登山界で最もよく知られているが、西欧でも知られているのは、氷壁登りの教本に必ず載っている「アバラーコフのアイス砂時計」略して「アバラーコフ」のおかげだろう。

サラディンと出会ったとき、エフゲーニーとヴィタリ・アバラーコフはまだ三〇歳そこそこだったが、すでにエリートに属しており、とくにエフゲーニーは今日でも「ソ連最初のアルピニスト」と呼ばれている。彼は並はずれて身体強健な人間だったにちがいない。一九三三年に彼はソ連の最高峰（いまはコムニズム峰という名が人口に膾炙している）に初登頂した。このパミールにそびえる標高七四九五メートルの巨峰で、エフゲーニーは遠征隊長のニコライ・ペトロヴィッチ・ゴルブノフとともに重さ三五キロの自動気象観測機を七〇〇〇メートル地点まで担ぎ上げた。彼はまた遠征中に何度も他の隊員を命にかかわる危機的状況から救った。隊長がこれ以上進めなくなったとき、アバラーコフは五時間にわたる単独行で登頂し、この偉業は「ロシア・アルピニズムの初勝利」と讃えられた。

つぎの目標ははっきりしていた。つい先ごろまでソ連の最高峰とされていた山。一九三四年、エフゲーニー・アバラーコフは他の隊員とともに標高七一三四メートルのレーニン

峰に登った。あの時代の流儀にふさわしく、頂上の岩にレーニンの胸像がとりつけられた。国費で行われた遠征の隊長は最高ランクの政治家だった。ニコライ・ワシリエヴィッチ・クルイレンコ、かつての赤軍最高司令官、一九一八年から一九二二年まで革命法廷長官、その後も法務省の要職にあり、スターリンと直接のコンタクトがあった。一九三八年、粛清の最悪の時期に、それが命取りになったらしい。スターリンの命令で彼は殺された。クルイレンコは帝政時代の一九一四年にスイスに亡命したとき、能動的保養を信奉し、登山の愛好者になった。

労働組合が資金を提供した遠征

アバラーコフは卓越した登山家であるだけでなく、才能に恵まれた画家で彫刻家だった。クルイレンコはエフゲーニーに目をかけ、金時計を贈って表彰し、「アルピニズム功労マイスター」の称号を授与した。このコンタクトによって将来の遠征に資金面でのドアが大きく開かれた。おかげでハン・テングリ遠征に要する一万五〇〇〇ルーブルを調達し、サラディンのための資金を分担することも、アバラーコフにとっては問題がなくなった。労働者の平均年収が二五〇〇ルーブルだった時代に、彼は資金提供者の全連邦労働組合中央委員会から、サラディンのために一万ルーブルという金額を気前よく保証してもらった。ほとんど全ソビエト市民が加入する労働組合は莫大な財源を有しており、とくにレジャーとスポーツの分野に力を注いでいた。

サラディンはソビエト政府をスポンサーにした初めての、おそらくは唯一のスイス人だろう。サラディンはソ連のスパイであり、中ソ国境の戦略的探索を言葉、スケッチ、写真によって記録し、それを政府に売ったという噂が流れたのも故なしとしない。アンネマリー・シュヴァルツェンバッハはこの推測を雑誌『アジア』に寄せた記事でこうコメントしている。サラディンが撮った写真は地形測量の情報が欠けているので、情報機関にとってはなんの役にも立たないし、遠征の日程が詰まっていて、探索や測量をしている余裕はなかったと。

ハン・テングリ第三登

一九三六年六月にスイスを発ったとき、まだサラディンは標高七五四六メートルの未踏峰、中国領のムスタグ・アタの登頂を期待していた。すべては彼とロシアの友人が中国政府の許可を得られるかどうかにかかっていた。二番目の選択としてハン・テングリが浮上した。高いけれど急峻でなく、技術的な困難はなさそうなムスタグ・アタが登山家を引き付けるのは、初登頂の栄誉だった。ハン・テングリが登山家を魅了するのは山の秀麗さと困難さだった。

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハの本はべつの印象を呼び起こすとしても、ハン・テングリは既登の山だった。一九三六年九月に遠征隊がこの山の麓にやってきたときは、すでに二つのそれぞれ三名のチームが頂上に達していた。そのことをアバラーコフ兄弟は

知っていたし、サラディンも知っていた。五年前の一九三一年九月一日、ウクライナの登山家ミハイル・ポグレベツキーが隊員のフランツ・ザウベレルとボリス・チューリンとともに初めて雪に覆われた頂上を踏み、この成功は世間に知れわたった。すでに一九二九年に彼はこの山に挑んでいるが、南イヌイリチェク氷河を二〇〇メートルも進めなかった。一九三〇年には同時に三つの遠征隊がこの山に挑んだ。スホドルスキーは、公式の報告によれば、北側の六〇〇〇メートル地点の下で雪崩の危険のある深雪にはばまれ、撤退した。実際にはこの遠征隊の装備が劣悪で、適切に組織されていなかった。この山に西側と南側から挑んだ他の二つの遠征隊も同じように挫折した。こうしてふたたびポグレベツキーの出番になった。二年前の試登でこの山をよく知っているポグレベツキーのとったルートは以下の通り。イヌイリチェク氷河からチャパーエフ峰とハン・テングリの間の氷河が充満する狭い峡谷を詰めて西稜の裾のきわだった肩の下部に出て、さらに西稜のやや南の大きなリンネを経て頂上にいたる。このルートは今日でもめったにトレースされていない。

「モスクワ隊」と呼ばれたアバラーコフたちの遠征隊が到着する直前、アルマ・アタからやってきた登山家コロコルニコフ、キバルディン、チュチュニコフが一九三六年八月二四日に第二登として最高点に達した。かれらのルートはいまでは通常の登路になっている西稜をたどり、六七〇〇メートル地点でポグレベツキーのルートと合する。

サラディンはこのアルマ・アタの登山家たちと山への途上で出会った。かれらの顔は日焼けと雪焼けでぼろぼろになり、手は凍傷を負っていた。帰還が大幅に遅れたので、飛行機が旋回して捜索していた。アバラーコフが以下の会話を伝えている。

「登頂おめでとう、と言っているのかな？」

「うん、三人が八月二四日に登ったよ」

シュヴァルツェンバッハもこの出会いを記しているが、書き方はかなりちがっている。「ハン・テングリから来たと、かれらは告げる。七二〇〇メートルの頂上に達したかどうかは不明のままであるが、かれらは実証済みの戦士、勇敢な人々であり、サラディンらの手を握り、幸運を祈る」。登頂については一言もなく、すでに頂上が踏まれていることにも触れていない。逆にサラディンらの初登頂がくりかえし語られる。そもそもスウェン・ヘディンの序文からして、サラディンはハン・テングリへ、「前人未踏の頂上へ向かった」と書いている。どうしてそんなことになったのか？ 頂上はすでに二度も登られているのに。いっぽうシュヴァルツェンバッハの本のタイプ原稿には、アルマ・アタ隊の成功がちゃんと記されている。「ハン・テングリと接して中国との国境が延びている。いくつかの地図はこの山を中国領に記入しているが、イヌイリチェク谷の登路はキルギスタン・ソビエト共和国の地にあり、ロシアのアルピニストが一九三六年の夏、ほんの数週間前に、初めて登高を行なった」

推測するに、出版社の編集部がこのくだりを削ったのではないか。サラディンの行動に独自性をもたせ、よりドラマティックに、そう、よりヒロイックに見せるために。ある山を最初に登ったスイス人の本と、三番目に登った同国人の本とでは、売れ行きが全然ちが

う！

最北にして最寒の七〇〇〇メートル峰

モスクワ滞在中にムスタグ・アタの許可を得られなかったことから、ハン・テングリが浮上した。サラディンがこの山についていろいろ聞いていたことはまちがいない。たぶんゴットフリート・メルツバッハー（一八四三～一九二六）から。メルツバッハーは一九〇二年と一九〇三年の二つの大遠征で天山の全域を歩きまわり、ハン・テングリの登路を探った。この均整のとれた秀峰、夕陽に赤く輝く巨峰（カン・トオというモンゴル語の名は「血の山」を意味し、キルギス語で「精霊の王」という）は、冷徹な学究に熱っぽい言葉を吐露させた。「そこに、突然なにか白いものが……浮かび上がった。まだ明確ではないが、われわれが前進する一步ごとに、白いものは大きさを増し、巨大なかたちをとっていった。……壮大なピラミッドが姿を現わし、その基底部も見えてきた。巨峰、天山の王が、むきだしの巨体をうっとり眺める私の目にさらした。氷河に根を下ろした足から、陽光を浴びた霧のたなびく頭まで」。登頂の可能性についてはメルツバッハーはずっと冷静に見ていた。この山は登れない、最も優れた登山家でもチャンスは「確率五パーセント」以下、と彼は述べている。

メルツバッハーはハン・テングリの標高も測量した。彼はそれを七二〇〇メートルと測定している。この数値は現在の衛星によるデータよりも二〇〇メートルほど高い。いまでは岩の頂点が標高六九九六メートル、冠雪の最高点が七〇一〇メートルとされている。シュヴァルツェンバッハーの本が刊行されたころは、まだメルツバッハーの測定が唯一のものだった。今日の観点からは誤った標高が散見するのはそのためだ。

メルツバッハーの業績は測量と登路の探索だけでなく、氷河湖の描写もある。低いほうの北イヌイリチェク氷河と高いほうの南イヌイリチェク氷河の合流点にできた湖で、毎年七月、水量が最高点に達するとあふれだし、イヌイリチェク川の谷を水浸しにする。いまこの湖はメルツバッハー湖と呼ばれている。

サラディンがハン・テングリについてどれほど知っていたか、どれほど真剣にこの山を評価していたのか、詳しくはわからない。心がまえは前からあった。アバラーコフ兄弟が述べているように、すでに二年前からこの山はサラディンの念頭にあった。

ハン・テングリは地上最北の七〇〇〇メートル峰だ。パキスタンの高峰とくらべるとハン・テングリは六〇〇キロあまり北にあり、エベレストより一六〇〇キロも北に離れている。それがハン・テングリを寒い山、この高さでは最も寒い山にしており、あまつさえ風が孤立してそびえるピラミッドを四方八方から攻めたてる。今日でも、最善の装備にもかかわらず、毎年ここで登山者は凍傷を負っている。気象環境も厳しい。天山の天候はきわめて不安定であり、急激な変化と激しい吹雪にさらされる。真夏でもたった一日で一メートル以上雪が積もることがある。カザフスタンのステップとタクラマカン砂漠に挟まれた天山の位置が強風を引き起こし、風は高くなるほど激しくなる。無風状態はめったにない。

六〇〇〇メートルを越えると登山者は骨まで凍る寒風に苦しめられる。風が稜線に大きな雪底をつくるので、斜面は雪崩の危険がつきまとう。

天候を予測するのは非常にむずかしい。気圧計は多くの場合あてにならず、唯一の可能性は絹雲の観察で、通常この雲が出てから六ないし一〇時間後に悪天候をとまなう温暖前線あるいは閉塞前線をもたらす。天山における気象の特徴には早い冬の到来もある。八月の初めにはベースキャンプの高さ（四一〇〇メートル）でも夜になると気温がマイナス五度ぐらいまで落ちかねず、はやくも九月初めにはしばしばマイナス一五度を下まわり、マイナス二五度に下がったことすらある。七〇〇〇メートルでは気温が真夏でもマイナス三〇度に下がり、その寒さを風が増幅する。カザフ人の登山トレーナーでかつてはトップ登山家だったエルヴァンド・イリンスキーはそれを「天山では八月二〇日から冬がはじまる」と表現した。初期のハン・テングリ遠征隊は、今日の観点からすれば、いずれも来るのが遅く、九月になってから頂上に達している。かれらの最大の問題はつねに寒さだった。これは八月の末にベースキャンプにたどりついたサラディンの遠征にもあてはまる。

当代最強の高所登山家の一人

サラディンはスイスの国民的ヒーローではなかった。その死にいたるまで、彼の遠征報告を山岳雑誌で読んだり、講演を聴いたりして、彼を知っているスイス人はごく少なかった。彼の名が広く世間に知られるようになったのは、シュヴァルツェンバッハの本と彼女が書いた雑誌記事のおかげだった。世間にたいしてひかえめに、おのれの理念にのみ生きるトップ登山家の人物像が、にわかに衆目を集めた。では、サラディンはほんとうに当代一流の登山家だったのか？ われわれはこの問いを、ハン・テングリ遠征を手がかりに解明しようと思う。

一九三六年という時点では、明らかに七〇〇〇メートルを超えている山頂を初めて人間が踏んでから、すでに二九年が過ぎていた。インドのトリスル。すでにその前の一八九二年にイギリス人のマーティン・コンウェイが、当時は七〇一〇メートル（実際は六五五〇メートル）とされたパイオニア・ピークに登頂している。その間にいくつかの七〇〇〇メートル峰が登られた。これら七〇〇〇メートル峰の大部分は、きついけれども急峻ではなく、技術的な困難はなかった。それは一九二七〔八？〕年にドイツのパミール遠征隊が登ったレーニン峰にもあてはまる。

ハン・テングリはべつだった。山にいたる道程からして大変だった。最後の集落から麓までしばしば数時間でたどりつけるネパールの山々とちがいで、ハン・テングリの頂上まで一五〇キロを経なければならず、そのうちの六〇キロは氷河上だった。人跡はほとんどなかった。とくに牧人がみんな山地を去って山里の村落に帰ってしまうと。探検家がハン・テングリの麓に初めて達するだけで、かなりの年数を要したのも不思議ではない。キルギス・カザフ国境の町カルカラからハン・テングリの裾のベースキャンプまで、ヘリコプターで四十分で飛んでゆき、イヌイリチェク谷の氷塊が錯綜する果てしない氷河を眺めるこ

とができる今日では、むかしの登山家がここまで——北極外ではパミールのフェドチェンコ氷河とカラコルムのシアチェン氷河について三番目に長い氷河をたどり——馬でやってきた労苦は想像を絶するものがある。

山にたどりつく、ハン・テングリとチャパーエフ峰の間の狭い危険な谷を遡上する。いつ左右のセラックが雪崩を惹き起こすかわからない。だが本来の困難はさらに上、西陵の裾を形成する肩の上部からはじまる。はじめは平坦だが、しだいに急になり、岩が屹立する。その難度はまもなく三級、やがて四級になるが、すべて雪に覆われているので手袋で攀じ登らなければならない。確保の可能性は低い。土台の変成岩は剥がれやすく、リスはほとんどなく、上部の大理石は脆い。山稜がほとんど垂直になるところで右のリンネの裾にトラバースすると、そこに登頂の鍵となる地点がひかえている。U I A A (Union Internationale des Associations d'Alpinisme) が四級から五級と評価する難所が頂上のすぐ下までつづく。ハン・テングリは歩けば登れる山ではなく、体力とともに最高の集中力とアイゼンによる登攀の豊かな経験がもとめられる。困難は登高だけでなく、とりわけ下降で著しい。難儀な懸垂下降をしなければならず、クライミングダウンができるのは部分的にすぎない。上部での落下は死を意味するだろう。今日では山稜全体にフィックスザイルが張られ、それを伝って登高し、下降する。ザイルが撤去されたら、年間に登頂する五〇人から一〇〇人の登山者のうち、一〇人か二〇人くらいしか成功しないだろう。

ハン・テングリはその時代の最難の山のひとつだった。この山に登ることは、一九二四年にエベレストで八〇〇〇メートルの境界を越えたジョージ・マロリーの偉業、あるいは一九三四年のナンガ・パルバート遠征におけるヴィリー・メルクルの苦闘に匹敵する。たしかにハン・テングリはそれより低い、グレンドは困難であり、気温はヒマラヤの同じ高さの山よりも低い。

遠征の戦術もまったくちがう。多数のポーター、キャンプ、緊急時の救助員を擁する大部隊ではなく、五人の登山家が多かれ少なかれ運を天に任せて敢行したのだ。かれらを待っている要員はなく、望遠鏡でかれらを見守る者もなく、救助は絶対にありえず、自分のルックサックと数本のザイル以外はなにも携えていない。かれらが行なったのは、最も純粹かつ最もフェアな登山であり、非妥協的なアルパインスタイルと呼んでいいだろう。こんなふうには山に立ち向かい、不備な高度順化と不十分な装備で、頂上に達するには、ものすごい粘り強さと苦難に耐える能力を、前提条件として必要とする。それは現在の八〇〇〇メートル登高者の能力にひけをとらない。

一九三六年の遠征におけるサラディンは四輪車の五つ目の車輪ではなく、アバラーコフが述べているように、登高における指導的メンバーの一人だった。その業績を今日も讃えられている強豪ぞろいのチームのなかで。たしかにサラディンは当時の「最高の」スイス人ではなかった。たとえばマルセル・クルツは一九三〇年に標高七四五七メートルのネパールのジョンソン・ピークを、アンドレ・ロックは一九三四年に標高七四二二メートルのカラコルムのシア・カンリに初登頂している。とはいえサラディンが当時のスイスのベ

スト高所登山家に数えられることはまちがいない。もし彼が生きつづけていたら、かならずや第一人者の座に列したことだろう。

不備な高度順化、その他の誤り

生き延びた遠征隊員たちは、エフゲーニー・アバラーコフを除く全員が負った凍傷の原因をくりかえし問われた。今日の目で見れば、それは計画と遠征行動中における基本的な誤りの結果だった。まず第一に、病んだ隊員を遠征に同行させないという鉄則が破られたことだ。レオニード・グートマンはすでにモスクワ出発時から介助が必要だった。彼はパミール滞在中に登山ができなかったどころか、病院に行くほど体調が悪かった。高度順化はゼロに等しかった。天山遠征当初は健康だったと伝えられているが、衰弱していたことはまちがいない。登山の全行程を通して彼は仲間の手を借りなければならなかった。最初に凍傷を負ったのも彼だ。下降中に彼は転落した。仲間の救助がなければ、半ば目が見えず、歩行困難で、幻覚を起こしていた彼は、まちがいなく死んだだろう。だがレオニード・グートマンだけでなく、ヴィタリ・アバラーコフも苦闘を強いられた。元気な弟にひきかえ、ヴィタリは登頂の日で大問題をかかえていた。両手両足が凍傷を負っていたのだ。

遠征にかんするロシア語の文献を読んで気になるのは、ヴィタリが遠征に参加したのは偶然にすぎなかったことだ。カフカスで二つの山岳スポーツ学校の指導者を勤めていたヴィタリ・アバラーコフは、ある日弟から遠征参加を要請する電報を受けとった。遠征隊はがたがただ、グートマンは病氣、助けに来てくれ。ヴィタリがのちに書いているように、彼に参加を促したのは、山への興味よりは弟の身に起こることを心配したからだ。「かれらになにかあったら、私は一生悔やむことになるだろう」

この遠征はエフゲーニーが初めて独自に行なうものだった。そこには登山家としての将来がかかっていた。ようやくカラコルでヴィタリは隊に合流した。まさに最後の瞬間に。彼に欠けていたのは他のメンバーがパミールで行なった高度順化だけでなく、装備も不十分だった。彼の衣服はカフカスでは充分でも、天山の凍るような風には太刀打ちできないものだった。山靴も持っていなかった。彼が履いていたのはソビエト陸軍の軍靴で、山には適切でなく、アイゼンにも合わなかった。彼は決断の代価を六本の足指で支払うことになる。

第三の、そして最大の誤りは、不十分な高度順化だった。七〇〇〇メートル峰の頂上に登るには、何日もかけて六〇〇〇メートルまで登り、そこで何度か泊まることが勧められている。こうして体を高度に順応させるのだ。体は低い気圧と乏しい酸素に反応する。赤血球の数が増し、肺は酸素をより効率的に活用し、脳が気圧に慣れる。この高度順化の日々は苦しく、テントの中で寝ているだけで、ほとんど動かなくても体力を消耗する。そのため勧められるのは、頂上アタックの前にいったん山麓にもどり、そこで体を癒すことだ。この順化の原則——登高、泊まり、再下降、休息、より高く登高、泊まり、下降、休息、さらにもっと高く登高——は鋸齒テクニックとも呼ばれる。これは高所登山の成功の鍵で

あり、順化の原則を無視し、すぐさま、再下降をせずに、どんどん高所へ登りつづけると、命を危険にさらすことになる。刺すような頭痛が起こり、前進するのに信じがたいほど骨が折れ、血液の循環が悪くなり、手指足指が氷のように冷たくなる。たとえ温かい乾いた手袋や靴下を履いていても。ひどい場合は水腫を起こす。脳水腫になると脳の機能を強く損ない、バランス、すばやい思考、合理的な状況判断など、重要な調整能力を失う。そうになると、救助がなければ、死ぬ。肺水腫を起こすと肺に水がたまる。呼吸が困難になり、体力は衰弱し、数時間で意識不明になり、死にいたる。

死の縁の難行軍

遠征隊がハン・テングリの麓に立ったころ、高度順化にかんする知識はまだそれほど明確ではなかった。本来は、ヴィタリ・アバラーコフが述べているように、隊員たちは遠征の準備を充分にして、慎重にトレーニングを重ねるつもりだった。しかしその時間がなかった。あらゆる規則が破られた。そもそも高度に順化した隊員は二人しかいなかった。エフゲーニーとサラディン。この二人はパミールで五二〇〇メートルの頂上に登っている。しかし五〇〇〇メートルより下で泊まったので、この順化も不十分だった。他の隊員はその数週間、高所には行かなかったも同然だった。それはとくに病気だったグートマンにあてはまる。ヴィタリがカフカスで行なった高度順化はずっと以前のことで、すでに効き目は薄れていた。

遠征隊は時間に責め立てられた。来るのが遅すぎて、時はすでに秋、本来なら頂上にいなければならぬのに、まだ山に入ってもいなかった。悪天候と寒気が迫り、助成金は使いはたした。空手で帰ったら、かれらの評判はどうか？ かれらの未来は？ ヴィタリ・アバラーコフは撤退を考えた。駆動力はサラディンだった。体力的に最強の彼がつねに突進した。チャンスは一度しかないことを彼は知っていた。「暗い影が当時のヨーロッパに垂れこめ、自分に二度目のチャンスはないと、レントツ〔ロレンツの愛称〕は感じていた」と、ヴィタリ・アバラーコフは書いている。休息もなく、再下降もなく、遠征隊は重いリュックサックをかっいで一気に頂上に迫ろうとした。備蓄のキャンプはなく、救援要員も、通信連絡のできるベースキャンプのキーパーもいなかった。

すぐさま高所の徴候が表れた。前進がしだいに緩慢になった。凍傷が手足を冒しだした。グートマンとダディオモフが無気力になり、状況を判断できなくなった。もはや合理的に考えられる隊員はほとんどいなかった。チームは荷物を置いて頂上へ向かうことにしたが、成し遂げられず、六八〇〇メートル地点の狭い雪洞でビバークするはめになった。そのための装備もなく。破滅的な決断だった。みんなすさまじく凍え、ごくわずかな飲料しかない。血液循環がどんどん悪化し、死のスパイラルが回りはじめた。

ヴィタリ・アバラーコフの精神状態も悪化した。彼はアイゼンをキャンプに忘れ、登頂の日は仲間にかろうじて確保してもらうしかなかった。頂上では五人の隊員のうち四人が手に凍傷を負っていた。エフゲーニーが全員の名を紙に書き、それをサラディンからもら

った缶に入れ、石を重しにして、右の岩塊のくぼみに置いた。

下降中にザイルを一本失った。エフゲーニーが岩にひっかかったザイルを回収し、端を歯にくわえて攀じ登り、他の隊員の懸垂下降を可能にするまで、貴重な時間が過ぎていった。下降は果てしなくつづいた。みんな完全に消耗し、骨まで痩せ細った。ダディオモフは何度も転倒し、滑ってヴィタリ・アバラコフの背中をアイゼンで刺したこともある。難行軍だった。さらに下でグートマンがバランスを失って転落した。彼を雪洞に連れもどすことができず、しばらく外に、多かれ少なかれ意識不明のまま、寝かせるしかなかった。

かれらは犯した誤りのツケを払わされた。生きて山麓にもどれたのは幸運と言うしかなかった。右手の四本の指と、左右の足指を三本ずつ切断したヴィタリは、遠征後の数年、登山を中断せざるをえなかったが、彼はハン・テングリ遠征を人生最大の教師と呼んでいる。彼も凍傷の原因を、計画における誤った判断と、山を甘く見たことに求めている。「われわれの力量よりも、われわれのうぬぼれのほうが大きかった。なんでもできる！ われわれは若くて、強くて、トレーニングを積み、高慢になって、真剣な準備もなしに偉大な山に挑んだ。自然に厳しい教育を授けられ、初めてわれわれは理解した。アルピニズムにおいていちばん大切なのは力や技術や勇気ではなく、賢い頭だということを」

この良心の呵責と、モスクワで迎えてくれたクルイレンコの批判的な言葉の印象を、彼は生涯にわたって抱きつづけた。一九八〇年代の初めになっても、ヴィタリは「当時のわれわれにはハン・テングリに登る権利がなかった」と述べている。飛行機が頭上で旋回するのに着陸できず、レンツはますます衰弱するのに救援はなく、希望は絶え、各人が自分自身の生き残りのために闘っているとき、彼はそのことを自覚した。野放図な冒険心、責任と致命的なリスクとの間のぎりぎりの境界は、彼には過去のものになった。のちに彼は何度も困難な遠征の隊長を勤めたが、一度も遭難はなく、まして一人の死者も出さなかった。彼の戦術は入念な準備、適切な装備の選択、包括的な順化プログラム、物資のデポによる安全備蓄の設置に裏づけられている。残念ながらロレンツ・サラディンのためには遅すぎたが。

岩と氷の混沌のなかで

登山者が手指足指の凍傷で死ぬことは無きに等しい。「凍傷では死なない」と、チューリッヒの大病院の元主任医師で、八〇〇〇メートル峰を何度も登ったオズワルド・エルツは言い、手足が黒くなるのは死刑判決ではないと述べている。では、どうしてサラディンは死んだのか？ とりあえずわかっていることから始めよう。

シュヴァルツェンバッハの記述とちがい、サラディンはすでに登頂の日、九月五日には重い凍傷を負っていた。サラディンがしょっちゅう写真を撮っていたことを毎日書き留めているエフゲーニー・アバラコフは、頂上でのようすをこう記している。「レンツはもう写真を撮らなかった。彼の両手は重い凍傷を負っていた。私は彼のライカをつかんで、数枚の写真を撮った」。サラディンの場合も凍傷は高度順化の不備、雪洞での寒いビバー

ク、脱水症、ぶっ通しの高所滞在に起因していた。

登頂のあとサラディンは、他の全員と同じく、苛烈な夜を過ごした。ひどく凍え、体は衰弱し、そのため血液循環も悪くなり、体温が下がった。九月六日の記録でエフゲーニーは、レンツの具合が良くない、しょっちゅう坐りこみ、休憩したがる、と書いている。なにをするにもエフゲーニーが手助けをしなければならなかった。もうサラディンはアイゼンを取り付けることも、衣服の脱着もできなかった。グートマンが九月六日に二〇〇メートル滑落してサラディンのルックサックを失った。そのためサラディンはそれからの数夜を楽にする寝袋その他の個人装備を失ったことも度外視できない。

シュヴァルツェンバッハは雑誌『アトランティス』に「サラディン 中央アジアにおけるあるスイス人登山家の運命」と題して寄せた記事で、サラディンはグートマンのところまで降りてゆき、「半ば気を失った仲間を肩に担ぎ、そのまま第一キャンプまで運び下ろした」と書いている。しかし単身でこれほど骨の折れる救助ができるとは思えない。この記述はシュヴァルツェンバッハの潤色だろう。アバラーコフの報告とシュヴァルツェンバッハの本は異口同音に、エフゲーニー・アバラーコフとサラディンはいっしょに降りて、遭難者を助けにいったと述べている。サラディンは消耗の極にあり、彼にできたのは、エフゲーニーを手伝うぐらいのことだった。しかし二人いっしょでも運ぶことはできなかった。二人はグートマンを寝かせたまま、サラディンの勧告で雪洞にもどり、負傷者に茶を持って行ってやることにした。苦々しげにエフゲーニーは書いている。兄は彼とレンツとともにグートマンを雪洞に引っ張り上げる作業を手伝うのを拒否したと。凍傷を負ったヴィタリにはそれができなかったのだ。わけのわからない呻き声を上げ、なにも見えなくなるほど目を傷めたグートマンは、茶をほんのすこしすすただけだった。何時間も経って、ようやくエフゲーニーとサラディンは彼を雪洞に連れもどすことができた。

サラディンは力を使い尽くした。五九〇〇メートル地点の雪洞の夜は凄絶だった。洞内は狭く、まんなかに横たわるグートマンが空間の最大部分を占めた。サラディンとエフゲーニーは身を寄せ合って出口近くの濡れたテント布地の上に坐り、歯をがちがち鳴らしながら朝を待った。「果てしなく夜はつづいた」とエフゲーニーは書いている。その乾いた語調から寒気、渇き、苦痛が伝わってくる。山での誤りをわれわれはアバラーコフ兄弟の書いたものから知ることができる。目立つのは、各人が誤りを他の各人に押しつけていることだ。それらを照合することによって、はじめて全体像が浮かび上がる。

九月七日のうちに、サラディンの手足に黒い箇所ができた。トラウマを負った男たちは氷と雪の斜面をよるめきながら山麓へ下っていったが、グートマンが歩けないので下山ははかどらなかった。仲間たちはグートマンをできるかぎり引いていったが、一〇〇メートルほどでギブアップした。その晩はテントに這いこんだ。落ちてくる氷や雪崩に脅えながら。彼らがたどってきた道は雪崩に埋まっていた。翌日ようやくキャンプに着いた。サラディンが先頭を歩いた。具合がすこし良くなった感じがした。ぽつんと立つ無人のテントには食糧があり、みんな死んだように眠り、しきりに飲んだ。キャラバンが来てくれるの

を期待して、三日間キャンプに留まり、静養した。サラディンは他の隊員より弱っているわけではなく、写真を撮るため短い遠足をエフゲーニーに迫りさえした。彼はもうカメラを操作できず、カメラをエフゲーニーに渡し、撮り方を教え、モチーフを示唆した。キャンプ停滞中にサラディンは凍傷を治療しようとした。もちろん、どうすればよいのか知りもせずに。黒い箇所を彼はナイフで削りとり、そこに石油をしみこませた。

凍傷仲間のヴィタリは書いている。「私は熱があり、非常に弱った感じがする。メルツバッハー草原まで二〇キロある。道ではなく、新雪に覆われた岩と氷の混沌のなかを」。一メートルごとにクレバスに落ちるおそれがあった。降雪のあとなのでほとんど全行程をピッケルでクレバスを探りながら進まなければならなかった。九月一二日に文明世界への帰還行軍がはじまった。サラディンの具合がまた悪くなった。休んでも回復せず、休憩を延ばしてくれとたのんだりした。歩行が困難になっていた。たぶん凍傷の足が痛むから、たぶん病気だから。キャラバンと出会ったので、彼は鞍に乗せてもらった。九月一三日と一四日にはもっと悪くなった。動くのもひと苦労なので、騎馬で進むよう説き伏せるのがむずかしかった。寝息が重苦しく、熱を発し、それがどんどん高くなった。翌日の騎馬行軍は論外だった。サラディンは病んでいた。アバラーコフがサラディンの両手の水疱を切開し、水をしぼりだした。サラディンはみずから希望してかかとも切開してもらった。凍傷の下に健康な肉があるのをたしかめて、彼は喜んだ。ほとんどなにも食べなかった。仲間が額に載せてくれる氷の湿布で熱と闘った。

サラディンの病気にもかかわらず、九月一六日に帰還行軍は続行された。チームは短波無線機（おそらく）のモールス信号で来援をもとめたアルマ・アタからの救援隊を心待ちにしていた。サラディンはうまく乗馬ができないので、落ちないように特製の鞍に縛り付けられた。そこに坐った重病人は前後左右に揺れながら、石ころだらけの道の苦しい騎馬行軍をつづけた。この旅は彼にとって正真正銘の拷問だったにちがいない。夜も静養にならなかった。眠りは非常に不安定で、発熱がつづいた。

サラディンの死

九月一七日にエフゲーニー・アバラーコフは、サラディンがうわごとを言い、ときどき脈絡のないことを話すのに気づく。見るからにひどい状態で、顔は痩せこけ、目は混濁し、苦悶の様相を呈している。それでもまた特製の鞍に縛り付けられる。サラディンが手袋を落としたので、エフゲーニーがそのことを指摘すると、サラディンの反応は困惑気味で、「わからない」とロシア語で言う。一〇分後、鞍上の彼が前のめりに倒れる。すぐさまキャラバンは停止し、彼を鞍からほどいて下ろし、地面に横たえる。目に生氣がなく、もう脈拍もない。いくら人工呼吸をほどこしても甲斐がない。瞳孔は停止し、もう反応を示さない。ロレンツ・サラディン死す。

精確な死因を知るには、この病状の描写はあまりにも素人っぽい。高山病で死んだのではなかった。もう十分に下降していたから。数日前は脱水症だったが、キャンプで十分に

水を飲んでいる。低体温症も除外できる。遊牧民が出入りする高原までもどっていたから。凍傷は辛いけれど、命の危険はない。

下山中のサラディンが衰弱していたことはまちがいない。たった三日の休養で体力を消耗する帰還行軍がはじまったのだ。高地で艱難辛苦を切り抜けた登山家のだれもがそうなるように、サラディンの免疫システムはひどく損なわれた。この状態だと病原菌に感染しやすい。菌がどこから来ようと。もちろん風邪を引いて衰弱し、発熱し、この熱が長い騎馬行による体力の酷使で悪化したことは考えられる。おそらく彼はキャンプで凍傷を汚れたナイフで切開したことによって感染し、それが敗血症、その結果として広範囲な炎症、臓器不全を惹き起こしたのだろう。オズワルド・エルツも十中八九これが死因と見ている。「凍傷をナイフで切開するのは、現在では固く禁じられている。それは皮膚と環境に存在する病原菌に道を開くことになる」

サラディンが死んだ晩に検死した医師は敗血症と診断した。たとえサラディンがまだ生きていたとしても、医師は手のほどこしようがなかっただろう。彼の運命は、彼が氷河を離れ、イヌイリチェクの谷を両側に分ける緑の草原に来たとき、すでに確定していたのだ。

墓の所在は長く不明だった

死んだあとのサラディンから、なにが残されているだろうか、シュヴァルツェンバッハの本のほかに？

天山の奥に彼の名を冠する山がある。サラディン峰。標高六二八〇メートル、西のハン・テングリ、東のシャチョール峰の間にある。ハン・テングリを北から登ろうとした登山家のスホドルスキーとフェドセイェフが一九三一年に初登頂した。サラディン峰は長い山稜に屹立するたくさんのピークのひとつなので、一九三一年にはまだ無名峰だった。いつサラディンの名が冠せられたのか、だれが命名したのか、わかっていない。その名を示す記録を初めて目にしたのは、ヴァチェスラフ・オニシチェンコの『ハン・テングリ、天山。一九六四年モスクワ・スポーツ協会「トルード」の遠征』という報告だった。ふつうの地形図にこの山名は記されていない。シュヴァルツェンバッハの言を信じるならサラディンがのらくら者と呼んでいたグートマンの名が、サラディン峰よりちょっと低く、ハン・テングリからも数キロ遠い、五八一〇メートルのピークに付けられているのを見て、黄泉のサラディンはにやっと笑っているかもしれない……。

サラディンの墓の探索は長いあいだ徒労のままだった。その位置については三つの示唆がある。アンネマリー・シュヴァルツェンバッハはサリ・ジャス川とイヌイリチェク川との合流点のデルタに生える一叢のモミの下に埋葬したと書いている。直接関与した情報提供者としていちばん信頼できるアバラーコフの記録は、墓地をもっと上に遡らせている。

「われわれはレンツをカラコルまで運ばず、イヌイリチェク川に葬ることにした。……サリ・ジャスから一六ないし二〇キロ手前でわれわれは停止した。われわれは彼を埋葬した。私は鉛筆で石に文字を書き、墓の上に置いた。“サラディン、レンツ 一九三六年九月一

七日没”。墓碑銘を刻むことはできなかった。安らかに眠れ、友よ！　きみの死は悲劇だ、故郷と愛する人々からかくも遠く離れて」

サラディンがそそくさと埋葬されたのは、ヴィタリと、とりわけダディオモフが一刻も早く病院に行く必要があったからだ。儀式や墓づくりに延々と費やす時間はなかった。とはいえ、一九三八年に標高七四三九メートルのポベータ峰初登頂をめざして天山を再訪したグートマン、あるいは一九五六年に同峰の登頂ルートを開いたヴィタリ・アバラーコフが、旅の途上で川沿いの岩にサラディンのための銘板を取り付けることはできただろう。二〇〇八年にようやく墓が見つかった。サラディンの名前はとっくに消えていて、現地の住民の話では、もとは木片の上に建っていたという。ここにサラディンが眠っていることは、ほぼまちがいない。ほかに墓はなく、位置はアバラーコフの描写とぴったり合う。墓の頭部を形成する大きな石に、ハン・テングリの輪郭と十字が剥げた青色で描かれていた。

登頂の証拠写真

サラディンの個人的な記録類に、一連の手紙、日記、そして膨大な写真が残っている。そのなかには貴重な記録的価値を有するものもいくつかある。ハン・テングリ登山の頂上写真が当初センセーションを巻き起こした。その間で登頂チームが休憩している二つの岩塊がどこにあるのか、ハン・テングリ登山者の誰一人として知らなかった。なにしろ本来の頂上は雪をかぶっていて、そのまわりに小さな岩がわずかに顔を出しているだけなのだから。そもそもこれは頂上の写真なのか？　私が二〇〇五年にこの山を越えたとき、サラディンの写真にある二つの岩塊と出会った。それは最高点から北側に二、三〇メートル下、歩いて五分のところにある。エフゲーニー・アバラーコフは、チームは頂上でかなり時間をかけて先蹤者が残した記録をさがし、そのため山頂の周囲をぐるりと回ったと述べている。おそらくそのときに、登高・下降ルートから離れたところにある写真の岩に行き着いたのだろう。この写真は登頂の証拠としてふさわしい。なにしろ岩塊は非常に独特の外観をしていて、世界に二つとないのだから。こうして、頂上写真がしばしば惹き起こす論争、あるいは虚偽の疑惑はすみやかに払拭された。

べつの写真には雪洞が写っている。この古い写真を新しい写真やビデオ映像と照らし合わせると、雪洞の位置を特定できる。そこは標高六八〇〇メートル、大きなクローワールの端の雪をかぶった小さい肩にある。ここから二時間、最大三時間、短い急な段と急な雪原を越えて頂上に達する。ハン・テングリを二〇回も登頂し、この山に精通しているグレブ・ソコロフが断言しているように、この位置が雪洞に向いているとはとても言えない。雪をかぶった肩の両側は急に切れ落ち、雪洞の場所は五人を収容するには狭すぎる。緊急ビバークはおそろしく窮屈で、遠征隊員は八寒地獄のような夜を過ごしたにちがいない。

写真は第二の情熱

アメリカの旅ではときおり写真を撮るだけだったサラディンは、遅くとも一九三四年の

カフカス遠征でアルパイン・スキーの名手オットー・フッターと知り合い、その縁であるプロ写真家と懇意になった。たちまち写真熱に感染した。いまや彼は、やはり熱狂的な登山家だった弟のペーターとともに、写真を撮りまくった。二人はステレオ・カメラにも手を出し、それをロレンツは最初のパミール遠征にも携行した。すばらしいステレオ写真のガラス板はいまでもたくさん保存されている。ペーター・サラディンは兄のライカ購入の保証人にもなり、ロレンツが不帰の人になると代金を支払った。

ロレンツはカメラを非常に重視していたにちがいない。ごく簡単な記述だが規則正しく付けていた一九三六年の日記を、彼はカラコルを発つさいにすっかり中断したが、写真撮影はやめなかった。それどころか！ たぶん彼にとって写真は文字よりも重要だったのだろう。それにエフゲーニー・アバラーコフがきちんと日記を付けているので、必要とあれば重要なデータを読ませてもらえることがわかっていたからだろう。天山遠征でサラディンは憑かれたように写真を撮った。そのことではエフゲーニー・アバラーコフの数々の証言がある。「レンツはたくさん撮影した」、「レンツは写真を撮るため先行することにした」、「レンツはきちがいみたいに飛びまわって写真を撮った」、「レンツは夢中になってカメラをかまえる」。しかしフィルムのは質は良くなかったと、モスクワでそれを見せてもらったアンネマリー・シュヴァルツェンバッハは書いている。

一九三六年のサラディンは人間の撮影に興味をつのらせていたのがわかる。彼はキルギス人の家族、馬に乗る人々、ケシ栽培農民を撮った。これらの写真は、技術的な完全性はべつにして、民族誌上の価値が高い。アンネマリー・シュヴァルツェンバッハは写真を唯一の手がかりにして旅のさまざまなディテールをあとづけることができた。サラディンはプロ写真家への途上にあったと評価してもよいだろう。彼の写真はトリミングを選択する研ぎすまされた目を示している。彼は演出するモチーフを考えぬいた。エフゲーニー・アバラーコフがパミールでわざわざ岩壁に登ったのは、サラディンがクライミングとハーケン打ちを撮影できるようにするためだったという。さらに彼は被写体を活気づけ、やる気にさせるすべを心得ていた。たとえば草原で撮った三人の遊牧民の子供たちの写真がそれを示している。いまその一部がベルンのスイス文書館とスイス山岳博物館にあるサラディンの写真には、「スイス通信社 E・ピカール チューリッヒ E P I C」とスタンプされたものが数枚ある。おそらくサラディンは遠征を前にして、自分の写真を商品化する契約を結んだのだろう。ピカールには旅行の手記も送っている。

友人たちの運命

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハの本は一九三八年秋に刊行された。サラディンとともに山に登った人々がその後どうなったか、そのとき彼女は知らなかったし、一九四二年に死ぬまで聞いていなかっただろう。

エフゲーニーをサラディンはすっかり信頼するようになり、関係は親密になり、友情が育まれた。遠征中の二人はいつもいっしょだった。休息日にもいっしょに周辺を散策し、

写真を撮った。エフゲーニーは隊員のなかで物理的損傷は最も少なかったが、精神的な痛手は最も大きかった。サラディンの死後、彼の追悼会を催し、大きな肖像画を描いて舞台に飾ったのは、エフゲーニーとゲオルギー・ハルランピエフだったと思われる。サラディンはスイスよりもロシアで有名になった。

天山から帰還したエフゲーニー・アバラーコフは芸術に専念した。彼は権威ある団体「ソビエト芸術家同盟」の会員だった。注目を浴びる彫刻作品が彼の手で製作された。「女性アルピニスト」、「自由の歌」、「戦争アルピニスト」等々。今日の目でみれば、それらの作品がヒロイックな、そう「典型的ソビエト風」な感じを与えることは否めない。しかしこの芸術家の特徴は時代に安住しないことで、創造者にして思索者としての彼の才能を物語っている。そのことは彼の活動を見てもわかる。エフゲーニーは遠征にかんする数々の論考を発表し、本を書き、講演を行なった。だが彼は芸術家としての人生に甘んじなかった。一九三七年、彼は山に復帰した。三回のカフカス遠征、二回のパミール遠征、一回の天山北部遠征がつづいた。彼は同時代の最も著名で最も成功したアルピニストでありつづけた。戦争中も彼は山で過ごした。カフカスの山中で彼はファシストの山岳部隊「エーデルヴァイス」と戦った。

一九四九年三月二三日から二四日にかけての夜、エフゲーニーは四二歳で急死した。それもモスクワの住居での不審死。公式にはガス事故とされている。しかし多くの知人が疑念を抱き、殺人説が、とりわけエフゲーニーの近親者から語られている。彼の息子アレクセイは長い調査のすえ、二〇〇〇年に『エフゲーニー・アバラーコフの死をめぐる秘密——歴史の読まれざるページ』と題する本を出した。そこで彼は陰謀殺人説を立てている。そこで指摘されているのは、世界的強国——大英帝国、ソビエト連邦、ドイツ、アメリカ合衆国——が一九三〇年代と四〇年代にアジアの山で植民地主義的利益を確保しようとしていたことだ。とくに大英帝国にとって地上最高峰の登頂は、二、三のアルピニストの個人的野心をはるかに凌駕する意味があった。シャクルトンやスコットの南極遠征であれ、エベレストの初登頂であれ、帝国は地図の空白地帯の征服に莫大なエネルギーを注いだ。主要な目的はそこで見いだす地下資源でも金銭でもなかった。動機はべつのところにあった。巨大帝国は権威の証明を必要とし、万人が認める英雄と勝利者を必要とした。インド在住の山男であろうと、ロンドン・ハイソサエティの貴顕紳士であろうと。

アレクセイ・アバラーコフによればソ連も執拗に山の征服計画を追及した。国家対国家、体制対体制、そして登山家は国威発揚闘争の担い手になった。こうして八〇〇〇メートルの高峰、エベレストやK2の登頂計画が練られた。その計画が数か月で実現できるところまで熟していたことも考えられる。そういう企図の筆頭にいたのがエフゲーニー・アバラーコフだった。深い感銘を与えたスターリン峰の登頂成功によって、彼が高所登山の第一人者であることは知られていた。このソ連の企図を大英帝国が知らなかったはずはなく、競争者の計画を芽のうちに摘みとることに関心をつのらせた。そのため、彼の父はあの一九四九年の夜、イギリスのエージェントに殺された、とアレクセイは言う。

興味深いのはBBCが一九四九年に、エフゲーニー・アバラーコフが不審な状況で死亡したと伝えるいっぽう、ソ連の公式筋はガス管の欠陥が原因と発表したことだ。実のところ状況は今日まで明らかでなく、たしかな事実よりは謎のほうが多い。殺人説がほぼたしかだと思えるのは、あるアバラーコフの知人が言ったように、「ガスは人を選ばない」からだ。家屋の他の住人はガス事故の被害を受けておらず、しかも悲鳴を聞いており、血痕も残っていた。アバラーコフがソ連の秘密情報機関にねらわれていたこともありうる。スターリン治下のソ連は危険な場所だった。とりわけ有名人にとっては。

ヴィタリ・アバラーコフにとって手足の指の喪失は山のキャリアの終焉を意味した。二つの登山学校をカフカスで指導していた彼は、三〇歳で身障者になった。ある医師は包帯を巻かれた手足の指の切断面を指し示し、はっきりと引導を渡した。「これが理由で私はきみの山のキャリアは終わったものとみなす。これからは科学の頂上に突撃したまえ！」。プラハとベルリンでも行なっていた体操とスポーツのトレーナーとしての活動は、しだいに研究者の好奇心にとってかわられた。指の喪失というハンディキャップさえ、ヴィタリにとっては切断した指を補う整形器具を開発する動機になった。さまざまな技術改良とならんで彼はアルピニズムのための用具も発案した。登山用の特殊な手袋、雪崩用のシャベル。あまり有効でなかった従来のアイスハーケンにかわる用具を最初に考案したのも彼だった。彼がその原理と粘り強く取り組んだアイスクリュウを、いまではあらゆる氷壁登攀者が腰にぶらさげている。彼が考案し、彼の名で呼ばれるルックサックも大量に市場に出まわった。ソ連の登山者はみんなアバラーコフを知っていた。なにしろそれを背に負っているのだから！ もっともアバラーコフは企業が自分のアイデアに便乗するのをあまり喜ばず、彼はこのルックサックを「シュロット」と呼んだ。確保技術にもヴィタリは熱中した。当時ふつうだった膝がらみや肩がらみの確保が不完全なことを彼はよく知っていて、さまざまなザイルブレーキを発案し、そのアイデアで彼は一九七三年にUIAAに招聘された。

痛手を負って天山を去ってから二〇年を経て、ヴィタリはその地に帰ってきた。はやばやと身障者になった深い痛苦は彼をさいなんだ。知人たちは彼を、野心的で自分にも他人にも厳しいと言っている。おそらく彼は、自分はまだ終わっていないこと、弟に刻みこまれたアバラーコフという名の名声は生き続け、いまなお「アルピニスト・ナンバーワン」と結びついていることを、示したかったのだろう。ソ連はエフゲーニーとともに最高の登山家を失い、ヴィタリとともに手足の指のない身代わりを得た。粘り強さ、組織能力、そして意志力のおかげで、ヴィタリは弟がはじめた道をひとつひとつ進んでいった。ソ連のアルピニズムを語るとき、アバラーコフの名は二度にわたって登場する。

天山の最高峰、ポベダ峰（七四三九メートル）遠征隊長として、彼は一九五六年、かつてサラディンとともに歩いた道のりをふたたびたどった。登高は綿密に計画された。雪洞をつぎつぎに設け、どの雪洞にも食糧、コンロ、寝袋を装備し、悪天候や病気のさいにも安全を保証できるようにした。一九四七年まで一〇年間の強制休止ののちに登攀を再開

して以来、ヴィタリはつねにそうしてきた。そして、低めの八〇〇〇メートル峰に匹敵する困難を要求する山に新ルートを開き、一人の隊員を一日で頂上に登らせることに成功した。併せて三度、彼はレーニン峰に登った。

彼のチーム「スパルタケル **Spartaker**」はソビエト・アルピニズムのトレードマークになり、アバラーコフの名は登山の指導力を体現した。毎年ヴィタリは遠征隊を率い、パミールに職業登山家基地を建設し、「アルピニズム名誉トレーナー」になり、レーニン賞と国際友好賞を授与された。その厳しい指導のやり方に異論がないわけではなかったアバラーコフは、年齢とともに登山を断念したが、相談役、仲介者、著述家、語り部としてつねに山と関係していた。さまざまな役職のかたわら、「オーストリア・ソビエト協会」の副会長も務めている。彼は一九八六年に死んだ。

シュヴァルツェンバッハのあれこれの記録を照合すると、彼女はエフゲーニーとヴィタリを取りちがえているふしがある。たとえば彼女はエフゲーニーの凍傷を描写したり、彼がカフカスの登山学校に勤務していることに触れたりしている。いずれも該当するのはヴィタリのほうだ。ほかにも彼女はヴィタリをサラディンが尊敬する「マイスター・ツーリスト」として描いているが、この役柄はエフゲーニーにこそふさわしい。もっとも彼女は兄弟の一人にしか会っておらず、それも短時間だったことを思えば、まちがえるのも無理はないかもしれない。

ミーシャ・ダディオモフとレオニード・グートマンについてはあまりわかっていない。ダディオモフにたいしてサラディンは特別な関係を育んだらしく、この筋肉質でメランコリックなまなざしの若者は、目立つほどしばしばポートレート写真のモチーフになった。遠征での二人の出会いをサラディンはこう書き留めている。「嬉しい不意打ち。車両から降りるとミーシャがいる。なんと、去年のわが通訳と再会！」

グートマンは一九三八年に当時はまだ無名だったポベード峰に登るため天山を再訪した。レオニード・グートマン、エフゲーニー・イワノフ、アレクサンドル・シドレンコによる「コムソモール二〇年峰」（と、かれらは命名した）の登頂については今日でも異論があるが、この山がきわめて困難であることに変わりはなく、ごくわずかな人間しか頂上に達していない（この数年の全挑戦者の約九〇パーセントが敗退している）。最大の争点は遠征隊による頂上の描写と写真で、識者の見解によると、そこはポベード峰の頂上稜線から見たものにすぎないのではないかという。グートマンにとってサラディンの思い出はまだ新鮮だったようで、当時、まだヘリコプターは導入されていなかった時代（それがはじまるのは一九六四年ころから）に、あやうく自分も死出の旅路となるころだったかつての道程を徒歩でトレースした。グートマンは第二次大戦末期にレニングラードの近くで戦車の中で焼け死んだ。

強制収容所のアルピニスト

ゲオルギー・ハルランピエフのその後の運命をたどると、ソビエト史上最も陰惨な拷問

室に行き着く。まず目につくのは、一九三七年までしばしばメディアに登場していた彼の名が、ばったり跡絶えたことだ。まるでロシア・アルピニズムの地図から抹消されたかのように。いったいハルランピエフになにがあったのか？ あの時代の登山家の道と運命は稀有にして残酷だった。まだ艱難辛苦が足りぬと言わぬばかりに、かれらは山に登り、生命の危険を冒し、未踏の頂上をめぐる雪崩やクレバスや吹雪と闘った。かれらは信じていたのだろうか、山にいれば政治から逃れられると？ かれらは予感していただろうか、ソビエト社会主義共和国連邦の名のもとに領土を測量し、征服し、レーニンの胸像を七〇〇〇メートル峰に担ぎ上げ、山頂に「一〇月の勝利」、「レーニン」、「スターリン」の名を冠した自分たちが、まもなく献身してきた体制の犠牲者になることを？

粛清の最も暗い歳月は、共産党総会が一九三七年七月、共産主義に害をなすおそのある人間を追及し、無害にする指令を公布したときにはじまった。その歳月に何百万もの無辜の人々が失跡し、拷問され、強制収容所で過ごし、だれもが「人民の敵」の嫌疑を被りかねなかった。外国人とのいかなる接触も、国境地帯でのいかなる行為も、あるいは外国製の写真機の所持でさえ、スパイと疑われるに充分だった。「四人のロシア人のうち三人はスパイ」——この言葉は今日の世代の記憶にも残っている。アルピニストが迫害と殺害のターゲット・グループになったことは、今日まで少数のロシア人しか知らないし、外国ではもっと知られていない。

最初の犠牲者の一人はロシアの国境を越えて知られた外交官でアルピニストのワシーリー・ロギノヴィッチ・セメノフスキーだった。一九三七年一月六日から七日の夜、二度目のロシア人によるレーニン峰登頂から帰還した直後に、彼はモスクワの住居で逮捕された。告発の内容はスパイ行為とアルピニスト間でのファシスト結社の設立。その根拠はまったくばかげている——セメノフスキーがドイツの登山家ヴィリー・メルクルをウシバに案内し、ドイツ人、オーストリア人、スイス人と接触したのは、共産主義と闘うためにすぎず、「山」と「アルピニズム」という標語は、裏切り者がたくらむソ連にたいするテロ活動のための偽装の合い言葉である。セメノフスキーはむごたらしく拷問され、一九三八年二月二八日にモスクワ近郊のブトヴォにあるNKVDの処刑場で、他の五六二名の容疑者とともに銃殺された。

かつて山に登った人々がつぎつぎと国家テロルの犠牲になった。カフカスのエキスパートだったバルハシは一九三七年に連行され、極東の強制収容所で過酷な数十年をすごしたあと、ぼろぼろになって死んだ。オレーグ・カウフマンの身にも同じことが起こった。一九三八年二月二八日にオレーグ・コルスンが銃殺された。彼とともに登山ガイドのウラディ斯拉フ・ルサトヴィッチとレオニード・カミンケルも死んだ。一九三八年四月七日に同じくブトヴォでアルピニストのソロモン・スルツキン、アナトリー・レウィンスキー、グリゴリー・ローゼンツヴァイグが死んだ。同じく登山家のスタニスラフ・ガネツキーは一九三八年六月一四日に殺された。アウグスト・グランツベルグは一九三八年九月一〇日に銃殺され、ゲオルギー・ゲルングロスも同じく一九三八年、ミハイル・フリノフスキーは

一九四〇年二月四日に処刑された——他の多くの人々の名はとくに忘れられた。コムニズム峰初登頂で隊長を勤めたニコライ・ゴルブノフは一九三八年九月七日に銃殺された。

著名な政治家でアバラーコフ兄弟のパトロンだったニコライ・クルイレンコも一九三八年七月二九日に体制の犠牲になった。彼は法務省のトップであり、スターリンじきじきの命令で銃殺されたようだ。彼自身がソ連建国後の法廷に導入し、冷徹な法廷用語につつまれて酷烈な判決を下してきた方法が、いまや彼自身に適用された。

ヴィタリ・アバラーコフも逮捕され、あやうく銃殺される所だった。彼は一九三八年二月から一九四〇年までの二年間を獄中で過ごした。罪状は、「最良の登山家を根絶する陰謀」をくわだてたこと。この批難はハン・テングリ遠征と関連しているらしく、あのときはサラディンが死んだだけでなく、全隊員があやうく命を落とす所だった。さらに、彼が西側から来た人々と協力し、西側の登山用具を宣伝したという罪状も挙げられた。奇跡のようにヴィタリ・アバラーコフは恩赦リストに載せられた稀有な一人になり、釈放された。彼はひどく面変わりし、見る影もなくやつれ果てていた。拷問で歯をいくつか叩き落とされた。自分の逮捕とアルピニストの迫害と殺害にかんする一六ページにわたる彼の論評は、まちががなくロシア登山史の重要な記録だ。

エフゲーニー・アバラーコフはめずらしく逮捕を免れた。遠征の隊長だったにもかかわらず。それだけに一九四九年の急死はいっそう不可解で、いっそう意味深長だ。なぜ彼は逮捕されなかったのに、兄は投獄されたのか？ どうして彼は登山家のなかで唯一なにごともなかったのか？ 多くの疑問がいまだに答えを待っている。

サラディンの通訳でハン・テングリ登山の仲間だったミハイル・ダディオモフは、他の多くの人々と同じく跡形もなく消えた。一九三八年に逮捕されたことはわかっているが、彼の身になにがあったのか、いまだに明らかではない。

サラディンの親友だったゲオルギー・ハルランピエフの命は一九三八年五月二八日に奪われた。まだ三〇歳になったばかりだった。母親と、妊娠中の一八歳の妻があとに遺された。みんなから愛されたゴグ（ゲオルギーの愛称）は反革命のスパイだったと、判決は述べている。ドイツ人とスイス人、とりわけサラディンとの集中的なコンタクト、およびロレンツの弟ペーターから譲られたジューメンスの映画撮影機の所持が、その証拠とされた。アンネマリー・シュヴァルツェンバッハがハルランピエフと接触し、「禁断の」国境地帯を撮ったサラディンの写真を国際的なプレスに公表したことが、いかなる役割を演じたのか、明らかでない。ハルランピエフの関係文書のなかに、母親が一九五六年に軍事司法当局の検察官に宛てた手紙がある。

拝啓 検察官殿

私の息子がどこにいるのか、謹んでお尋ねいたします。一九三八年以来、私は息子の消息をまったく聞いておりません。私は七〇歳になり、息子がどこにいるのかわかれば、いつ死んでもかまいません。息子は音楽大学を修了しましたが、一九三八年三月に一〇年の

刑期で収容所に送られました。何の咎で？　ゲオルギー・アルカデヴィッチ・ハルランピエフは私といっしょに下記の住所に住んでおりました。……私はあなたの慈悲を信じております。一八年間泣き続けてきた老いたる母を助けてくださると。

敬具

アンナ・トロフィモヴナ・ハルランピエワ

サラディンは殺された？

ハン・テングリに向かったときのサラディンは、こんな恐ろしいことが起こることを予測できなかったし、自分との友好が、肅清時代にハルランピエフ、ダディオモフ、ヴィタリ・アバラーコフに投獄と死をもたらすなんて、思いもよらないことだった。

サラディンの子孫のあいだでは、ロレンツはハン・テングリからの下山後「ロシア人に殺された」という噂が今日まで語り継がれている。もちろん彼の忠実な山仲間には殺されたのではなく、おそらくスターリンの殺人部隊によって。殺し屋たちは「救援隊」を偽装して疲弊した遠征隊を出迎え、即決裁判を行ない、「スパイ」を地に埋めた。そのあとにつづく登山家にたいする弾圧の原因は、この非道な行為もそのひとつだと。もちろんこの異説は取るに足りない。もしこのような処罰行為があったとしたら、サラディンの撮った写真が禁断の国境地帯から外国に持ちだされることは、ありえなかっただろう。

とはいえ、ロレンツ・サラディンが名付け親になった甥、弟ペーターの息子は、第二次世界大戦直後に家族に届いた奇妙な通報を覚えている。元戦争捕虜だったあるオーストリア人が、雑誌『アジア』に載っているアンネマリー・シュヴァルツェンバッハのハン・テングリ遠征にかんする記事を読んで、ペーター・サラディンに手紙を書いた。いわく、自分はアルマ・アタの病院で働いていたが、そこで生存者の凍傷治療が行なわれた。ご家族に救助のさいのできごとにかんする真実をお伝えしたい、ついてはご協力をいただければ幸いであると。どうやら手紙の主はなんらかの支援、たぶん金銭を期待したらしい。しかしペーター・サラディンはまったく相手にしなかった。当時の彼は、ロレンツと同じく、スターリンを信奉していた。ずっとのちに、ふたたび未知の人物が家族に接触してきた。彼はロレンツが殺されたことを知っていると言ったという。

「ただの若者」に魅せられて

ロシアの登山家のあいだでは、いまなおサラディンの名を知っている人びとがいる。エフゲーニー・アバラーコフの自伝に描かれたハン・テングリ攻略の章はきわめて魅力的、かつきわめて悲劇的で、この本はたいていのロシアの登山家の書棚に収まっている。

スイスではアンネマリー・シュヴァルツェンバッハの本がなければ今日ではすっかり忘れられていただろう。だが、きわめてセンシブルな知識人で、全世界の文学界や芸術界と交際しているシュヴァルツェンバッハが、なぜ労働者階級出身の放浪者でアルピニストのサラディンの伝記を書く気になったのか？

二人が個人的に会ったことは十中八九なかっただろう。彼女は山が好きだったが登山家ではなく、アルピニズムにはほとんど関心がなかった。当時のサラディンがまったく無名だったわけではない。彼は最初の遠征のあとで講演し、その宣伝のためにチューリッヒでは独自の展示場が設けられ、そこに彼はピッケル、山靴、衣服、石、山羊の角、さらには剥製のシャモア〔アルプスカモシカ〕まで出品した。彼は山岳紙誌に記事を書き、共産党系の発行人ヴィリー・ミュンツェンベルクの有名な『労働者絵入り新聞』はカフカス遠征にかんする彼の写真と報告を一九三四年に掲載した。一九三六年六月二二日付の『チューリッヒ画報』に「内と外」と題して二人の世界放浪者シュヴァルツェンバッハとサラディンの写真が、それぞれ二枚ずつ同じページに載っている。一枚目の写真の彼女はフランスの外交官クロード・クララクとの結婚式のさいの簡素な花嫁衣装姿、二枚目は考古学の発掘現場でズボンを穿いている。彼女はこの写真に付して「男装の勇敢な女」とみずから記している。サラディンのほうは小サイズのポートレートのみ。

ロレンツ・サラディンにアンネマリー・シュヴァルツェンバッハはたいして関心がなかったことはたしかだ。一九三七年五月に、「たまたま」と彼女は書いているが、サラディンの悲劇的な運命を知るまでは。彼女は協力関係にあったチューリッヒの通信社ピカルで彼の撮った写真を見た。写真家でもあった彼女は映像の美学的な質と民族誌的な価値を見てとり、「第一級の間人記録」と評した。冒険好き、専門教育を修了せず、職場でも長つづきしない「ただの若者」に、これほど芸術的な表現力がある。たちまち彼女はサラディンに心を引かれた。

ロレンツの弟のペーター・サラディンは兄の手紙類をアンネマリー・シュヴァルツェンバッハに手交し、モスクワの遠征仲間からロレンツの遺品、とりわけ写真、映画フィルム、旅行ノートを返してもらってくるよう依頼した。彼女の決断はすばやかった。「私はペーター・サラディンから必要な全権を委ねられ、途中のベルリンでビザを入手し、タリンとレニングラードを経由したモスクワに向かった」

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハはスイスの反ファシズム作家としてモスクワの当局に知られており、必要なビザを問題なく取得した。彼女はすでに一九三四年八月にクラウス・マンに同行してソビエト作家同盟の第一回全国大会に参加していた。遺稿から公表された彼女のメモは、外国の客人として見学した社会主義建設にたいするほとんどナイーブな讃嘆を示している。赤軍のパレードにも彼女は感銘を受けた。しかし彼女は留保も述べている。「ソビエトロシア人の若いオプティミズムは讃美する価値があるけれども、私は悲しくなる。かれらは新しい世界を建設している——そして、それよりはるかに重要なのは、新しい人間を育てていることである。かれらは芸術を成功の目に見える表現として敬う。かれらが詩人を敬うのは、詩人がこの壮大な建設の本を書くからである。……しかし私はそういう世界を恐れる。詩人はつねに明るい世界の半面の事実と対決し、苦悩と矛盾が詩人を熟成させると、私は信じている。……ひそかに詩人は自分のなかに死への憧れ、疑い、そして愛を育んでいる……」

この言葉はトーマス・マンの『トニオ・クレガー』を想起させる。シュヴァルツェンバッハにとって芸術は悲痛、苦悩、内的な矛盾のもとで生まれるものであり、とりわけ欠乏に刻印されている。生命、愛、満足感、反対極の調和の欠乏に。「人間の最大の創造物は苦悩から生まれた」と、彼女是一九三九年にアフガニスタン旅行を共にしたエラ・マイヤールに語っている。

麻薬の禁断療法中に脱稿

モスクワで彼女はサラディンの遺品を預かっているゲオルギー・ハルランピエフと会った。この登山家にして芸術家との出会いは彼女に深い感銘を与えた。ハルランピエフは彼女を遠征隊員たちと引き合わせた。ヴィタリ・アバラーコフは彼女にハン・テングリのできごとの経緯を、ほかならぬサラディンが撮影したフィルムをもとに語った。お礼に彼女はハルランピエフが欲しがっていたスウェーデン製の石油コンロを贈った。ペーター・サラディンはロシア人にライカと映画撮影機も譲渡した。モスクワからアンネマリー・シュヴァルツェンバッハはサラディンがライカで撮った一二〇〇点の写真のネガと、サラディンの絶筆が記されたノートをスイスに持ち帰った。これらのドキュメントはいまベルンのスイス文書館に保管されている。

はやくも一九三七年一〇月に彼女はサラディンにかんする最初の記事を『チューリッヒ画報』に発表し、数点の彼の最高の写真がそれを引き立てた。これがジャーナリズムに高く評価され、雑誌『アトランティス』（一九三八年八月）、英語で雑誌『アジア』（一九三八年二月）と『ザ・ジェオグラフィカル・マガジン』（一九三八年九月）、スウェーデン最大の日刊紙『ストックホルムス・ティドニンゲン』（一九三八年一月）に取りあげられた。『ライフ』も写真と物語に関心を示したが、公表はされなかったようだ。これを本にするよう後押ししたのがだれなのか、わかっていない。『ロレンツ・サラディン 山の生涯』は一九三八年の秋にベルンのハルヴァーグ出版社から上梓された。サラディンの目を天山の山々に向けさせたといわれる、地理学者で紀行作家のスウェン・ヘディンが序文を書いている。この本はアンネマリー・シュヴァルツェンバッハの生涯でいちばんよく売れた作品になった。

脱稿したのは一九三八年七月二四日で、そのとき彼女はクロイツリンゲンのルートヴィヒ・ビンスヴァンガー病院で麻薬の禁断療法中だった。彼女は母親のレネー・シュヴァルツェンバッハ・ヴィレに手紙を書いた。「愛するマメリ、考えてもみて、今日わたしはほんとうにサラディンの本を書き上げたのよ、それこそ額に汗して」

スイスのプレスはこの本を好意的に論評し、スイス山岳会の機関紙『ディー・アルペン』も「簡潔で、共感のもてる、みごとに客観的な筆致だが、温かい思い入れをもって、著者は腰の落ち着かない人間の変転つねなき人生、その勝利、その早い死を描きだしている」と評した。当時すっかりナチスの管理下にあったドイツ山岳会の会報では、P・ガイスラー博士なる書評者が反ファシズム派の作品をくそみそにこきおろした。「西欧人には閉ざ

されたパミールと天山の山岳パラダイスの非常にすばらしい写真」というのが唯一の賞め言葉だが、それにも「その門戸がサラディンに開かれたのは彼の政治的立場のおかげにすぎない」というコメントが付いていた。

モスクワ訪問とならんでシュヴァルツェンバッハは、友人たちが「レンツリ」と呼んでいた若者の生涯とキャラクターを明らかにするため、さらに詳細な調査を行なった。ペーター・サラディンは愛する兄の人生を語り、兄のヨゼフは子供時代のエピソードを披露した。ある山仲間はヴェーギ谷とヴァリス山群での冒険を語った。サラディンが山岳雑誌に寄せたカフカスとパミールの遠征報告も資料になった。あまり調査が行き届かなかったのはサラディンの南米とアメリカ合衆国の遍歴時代だった——サラディン自身は簡単な履歴書のなかでアメリカに触れているだけだ。彼はペンの人ではなかった。いずれにしても感銘を受けるのは、アンネマリー・シュヴァルツェンバッハが詳細な調査にもとづいて、自分には未知の人間に感情移入し、さまざまなモザイク石から短いけれども波瀾に富んだ生涯の魅力的な伝記を書き上げたことだ。

ふたつの探究、ふたつの情熱

二人の共通点がアンネマリー・シュヴァルツェンバッハを引き付けたのかもしれない。絶えざる焦燥、休みなく旅立ちへと駆りたてる遠方への憧れ、二人はほとんどどこにも定住することがなかった。しかし、「だから彼は孤独なのであろう、一匹狼なのであろう、けっして地位や財産にも人間にも関わらないのであろう、だが彼は、だれもがそうであるように、友を求めた」。彼女もつねに旅の途上にあった。友を、愛を、支えとなる関係を見いだすために。「アンネマリー・シュヴァルツェンバッハの伝記的作品の主人公が行なうことのすべてを、彼女は孤独を克服するために行なっている」と、文芸評論家のシャルル・リンスマイヤーは書いている。

しかし彼女とちがってロレンツ・サラディンは、彼女も述べているように、「遠方への衝動」が逃走や口実、逃げ道や迷い道に等しいような遁走者ではなかった。「彼はある理念に支えられ、ある中身に満たされていた——山への情熱に」。彼女の人生は男たちや女たちとの熱烈な情事に刻印されていた。それは厄介な関係であり、彼女とそのパートナーにとってしばしば過重になり、破綻するたびに、彼女は筆舌に尽くしがたい苦しみを味わった。

それにひきかえサラディンは、少ないけれども心のこもった恒常的な関係を絶やさなかった。なかでも妹のアンナ、弟のペーターとその妻アグネスと。アグネスはサラディン兄弟と登攀やハイキングを楽しんだ。ロレンツは外国からもどつてくると、弟夫婦が住んでいるレーゲンスドルフの質素な労働者住宅で暮らした。ロレンツの死後ずっと歳月を経てからも、ペーターの息子は母親から自分の名付け親の話を聞きたがった。彼がとくに感銘を受けたエピソードがある。ロサンゼルスでゲッターでロレンツに唾を吐きかけた黒人に、彼は手をさしのべて、こう語りかけたという。「おれはあんたの友だちだよ」

ヴィタリ・アバラーコフはサラディンの特質を、あの時代の威勢のいいヒロイックな言葉づかいでこう述べる。「勤勉と、人の心を奮いたたせ、組織する能力によって、抜群の体力、信じがたいほどの耐久力、印象的な風貌によって、レンツは隊員の敬意と友情を獲得した」。そしてドイツ語でヴィタリは付言する。「彼はいいやつだった。いいリーダーだった。全員の内のベストだった」

シュヴァルツェンバッハのサラディンにかんするあらゆる記述から、「貧しいスイスの若者が、地球の半分以上を遍歴し、アルプスとピレネー、アンデスとロッキー・マウンテン、カフカス、ついには中央アジアの頂上に登る偉業をやったのけた」ことへの感嘆が読みとれる。このシュヴァルツブーベンラントの農村出身の無教育な労働者には、彼女とちがって、もろもろの不安も、そこから逃れようとする底深い悲しみもない。「彼の簡略なメモや数少ない手紙には、自分の大胆な行動の価値あるいは成功にたいする疑念や不安感を示す箇所がまったくない。困難は彼にとってたいしたことではなく、忍耐の試練や失望にたやすく耐えた。このように、外的なできごとに平静かつ巧みに対処できることは、サラディンの性格の特徴であった」。彼女は自分の知的な神経過敏さ、繊細さを苦痛と感じ、つねに不安感にさいなまれていた。彼は逆だった。揺るぎなく、単純で、泰然自若。

自分自身の憧れを投影する

こうして彼女は彼の本質のなかに、自分自身の、裕福な家の高等教育を受けた娘の、反転させた像を描きだす。彼女の父親はスイスで最も富裕な工場経営者の一人で、母親はヴィレ将軍の娘だった。アンネマリーは音楽の才に恵まれ、私立学校に通い、チューリッヒとパリの大学で学び、二三歳にして歴史の論文で博士号を取得し、同時期に最初の小説を上梓した。当時の最も傑出した作家たちと交際し、トーマス・マンのもとに出入りして、その娘エリカと息子クラウスと親密な関係を保った。自由奔放で、既製のモラルにとられないマン家の若い世代の周辺に、彼女は自分のブルジョア的で保守的な出自にたいする反世界を見だし、政治的には進歩的な反ファシズム派と接触した。この環境のなかで彼女は初めて麻薬にも手を出し、絶えずくりかえされる抑鬱状態から逃れようとした。

マン家との交際と彼女の政治的立場が母親レナーとの絶えざる深刻な葛藤の原因になった。将軍の娘である母親はヒトラーとナチスにたいするシンパシーを隠さなかった。本心ではとても愛していた「マメリ」とのままならぬ関係にアンネマリーは悩み抜いた。

恵まれた才能、伝説的な美貌、経済的困難のない境遇にもかかわらず、彼女には鬱症状がつきまとい、自分自身にたいする疑念にさいなまれ、愛と安らぎへの癒しがたい憧憬に駆りたてられた。たいていは自家用車を駆って行なわれた彼女の旅行は、しばしば深い悲しみからの逃避だった。モルヒネも、アルコールも、ホモの傾向のあるフランス人外交官との結婚も、逃げ道のひとつだったし、なんとか自殺もこころみている。

すでに子供のころからアンネマリーは自分を男の子として表出した。アレクシス・シュヴァルツェンバッハはレナー・シュヴァルツェンバッハ・ヴィレとその家族にかんする著

書でこう書いている。「おそらく彼女は、自分自身が男になれば、両親は自分を兄弟のようにあつかってくれると感じたのであろう」。アンネマリーはしばしば男装し、少年っぽい両性具有者、バイセクシャルのようにふるまい、とくにホモの男性を引き付けた。単純で、目的に向かってまっしぐら、男らしく勇敢で、筋肉隆々として、「ほとんど宿命的に確固たる意志を授かった」サラディンは、憧れの像を体現していた。死に臨んで不安のかけらも見せず——そう彼女はサラディンを描いている——、物的な保証はこれっぽっちもなく、最低の装備で世界屈指の高峰をつかみとった人間を。

「レンツリ」にまつわる女性あるいはガールフレンドに、シュヴァルツェンバッハはひとことも触れていない。彼女はまったく知らなかったようだが、サラディンは「恵まれた地位にある家」出身のある女性と長年の関係を結び、彼女の毛髪の房すら大切に持っていた。彼女はサラディンに、結婚したらどうかしら、そうすればもうそんなに孤独ではなくなるのに、という趣意の手紙を書いている。「彼は女性との幸運に恵まれなかった」とサラディンの甥は回想する。あるドイツの美人がすでに彼のもとに入居していたが、結婚の直前に彼から去っていった。「あれがうまくいっていたら、彼はロシアへ行かなかったんじゃないかな」

シュヴァルツェンバッハは彼の女性関係について沈黙することによって、彼の情熱が山一筋であることを強調したかったのかもしれない。いずれにしても、文学的アイデンティティーの人物像としてサラディンは彼女に、彼女自身の憧憬を、幸福をもとめる彼女自身のむなしい努力を投影する画面を提供したのだ。「たしかに彼は単純な人間であったが、情熱によって磨かれ、高貴にされた。……この情熱が彼を幸福な人間にしたのである」

彼女が詩のようなかたちで書き留めたメモに、「ハン・テングリ」と題した語句がある。「サラディンの魂はかの地、“孤独”の峰に残された。しかし彼は前よりもいっそう自分自身のものになった。もはや疑念が彼に迫ることはない。すぐさま彼はとりかかった。あそこへ帰る、というか、故郷へ帰る準備に」

結婚の計画が破れたあと、じっとしていられない彼の性格はいや増した。すでに天山へ出発する前から彼はつぎの遠征を計画していた。北米と南米を科学者、作家、撮影技師とともに横断する。この目的のため彼はすでに便箋も印刷していた。アドレスは「ロレンツ・サラディン遠征隊」

プロレタリアは「英雄的アルピニズム」に反対

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハはサラディンのなかに、政治的にしっかりした左翼の心情を有するプロレタリアも見いだした。彼の父親は、もともと建築士だが、さまざまな仕事、とくにコンクリート管の製造で、かつかつの生計を立てていた。両親が離別したあと、ロレンツ、その弟ペーター、妹アンナは施設に入った。ロレンツはあれこれの親方の徒弟になったが長つづきせず、そこから逃げだして製材所その他の工場で働き、第一次世界大戦中は軍務に就き、一人の相棒と衛生設備組立業を営んだあと、ヨーロッパ、

南米、アメリカ合衆国を遍歴し、いよいよ全情熱を遠方の山の探究に捧げることになる。

雑誌『ディー・アルペン』の編集者、マクス・エクスリンは、サラディンの死後一〇年の追想で、彼を「ロマン・ローランと同じく理想主義による共産主義者」と呼んだ。ロシア人の同伴者たちは彼を「反ファシスト」と呼んでいる。彼と弟のペーターはスイス共産党の党員だった。同党の機関紙『自由』は彼の死後、「サラディンはわれわれのもとに忘れがたく留まっており、ソビエトのアルピニストからも、山の真の息子、共産党の忠実な党員として、榮譽の記念碑を授けられている」と書いた。

いずれにしても彼は心情的に、アンネマリー・シュヴァルツェンバッハと同じく、左翼と親密だった。この政治的観点も、彼女がサラディンと取り組む動機になっただろう。なにしろあの時代は多くの最高の登山家がファシズムとナチズムに走ったから。

一九三〇年代の登山はきわめて政治的色彩を帯びていた。ドイツとオーストリアの登山家はハーケンクロイツのペナントを担いで世界の山々に挑み、一九三八年のアイガー北壁でも同じようなことをした。ナチスは登山の成功を宣伝に利用し尽くし、ヒトラーはアイガー北壁の初登攀者を謁見した。一九三四年にナンガ・パルバートで遠征隊長のヴィリー・メルクルを含む四人のドイツ人登山家と多数のシェルパが落命したとき、この山は「ドイツ人の運命の山」と宣言された。ヒトラー政権はこの遠征を支援し、莫大な物資、九人の登山家、三五人のシェルパ、五〇〇人のポーターを動員して、八〇〇〇メートル峰を「征服」しようとした。登山史家は三〇年代を英雄的アルピニズムの時代と呼んでいる。

「ロレンツ・サラディンは英雄であった。彼の行為は記念する価値がある」と、スウェン・ヘディンは時代精神に刻印された序文をシュヴァルツェンバッハの本に寄せている。ヘディンはナチズムの信奉者で、ヒトラーのドイツで讃美され、なんども「総統」と面談した。不思議なのは、アンネマリー・シュヴァルツェンバッハがヘディンの英雄主義的な序文を自分の本に受け入れたことだが、ヘディンはこの文章を、ストックホルムの新聞で彼女の本を紹介する記事にも使った。

しかし彼女も自分の「レンツリ」を英雄に仕立てている。不屈の意志をそなえた鉄人として——もっとも政治的に正反対の陣営の。この本の草稿で彼女はヴィリー・メルクルのウシバ南峰登攀の叙述を論難している。「なんと意識的な自分の行為の英雄化、なんと非スポーツ的な自分たちの勝利の強調、なんと大げさな言葉の選択!」。それに彼女はサラディンの慎ましさ、ウシバにかんする寡黙なメモを対置する。「われわれはこのために三日を要した」

彼女はサラディンのなかに北壁登攀やヒマラヤ征服への反対像も見ている。それらの偉業は宣伝に利用され尽くした。「彼の故郷スイスでアイガー北壁を登ることが、センセーショナルな行為であるかのように」。粘り強く、慎ましく、新聞の大見出しとは無縁に、サラディンは自分の目標を、まだほとんど未開拓の山で追いつづけた。レンツは登山するアーリア人への反対像だった。その政治的信条にもかかわらずサラディンはスイス山岳会ルセンドロ・セクションの会員だった——あの時代、いくつかのセクションは左翼の受け

入力を拒否したのだが。しかし彼はブルジョアの山岳会に対抗するプロレタリアの登山団体「自然の友」にも入会していた。

荷物のなかのピストル

当然のことながら、サラディンはソ連共産党の好意と支援に頼らざるをえなかった。当時モスクワにはドイツからの政治亡命者とともにスイスの共産主義者も大勢いた。その仲介者はコミンテルン執行委員会におけるスイス共産党の代表、コニー・マイヤーだった。彼はスイスから全権を委ねられ、モスクワにおけるスイス共産党員を審査した。スターリンの粛清と見世物裁判では多くのスイス人も強制収容所に消えたり、処刑されたりした。

マイヤーはソビエト労働組合連合による遠征資金の提供とサラディンの許可申請にも協力したと思われる。遠征隊がカラコルでサラディンのビザを待っていたとき、友人たちはコネを存分に駆使した。「著名な大物にかたっぱしから頼みこむ。一四通の電報が送られた。同志スターリンにも」とサラディンはメモしている。

サラディンの死を最初に伝えたのはコニー・マイヤーだった。スイスの党機関紙『自由』への電報。「サラディン・グループ ハン・テングリ下山 嵐 五名全員 手足に凍傷 サラディン 救護 敗血症 九月二日 死亡 手紙郵送中」

コニー・マイヤーはのちにサラディンのトランクを入手し、中身を調べたところ、アメリカの軍用拳銃「Model of 1911 USA Army」が四六発の弾丸とともに出てきた。彼はこの首を失いかねない物騒な発見物を当局に届けた。もちろんサラディンの身も、秘密警察が荷物を検査していたら、どうなっていたかわからない。なぜ彼はそんな危険に身をさらしたのか、なんのために武装したのか、いまだに謎のままだ。スイスの共産党機関紙が最初にサラディンの死を報じたことで、サラディンに押された「共産主義者」のスタンプは鮮明になった。登山家の世界で彼の業績が故意に軽視され、まもなく忘れられてしまったのは、ここに深い原因があるだろう。

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハは政治的関連を承知していたが、本を書くときは雑誌記事よりもずっと非政治的な筆致にした。そこには売れ行きを心配する出版社の意向が働いただろう。あの時代は「英雄的アルピニズム」が勝利を謳歌し、その悲劇も宣伝目的に濫用されていた。彼女の原稿と印刷された文章のあいだに興味深いずれがある。本の最後の文は「彼は全員の内のベストだった」となっているが、彼女のタイプ原稿では「彼は同志の内のベストだった」と書かれている。些細なちがいが、見過ごしにできない相違！ 本の他の箇所でも編集者は政治的概念を内包する「同志」という言葉を、たとえば「戦士」に置き換えている。このちがいを彼女は知っていたはずだが、原稿への介入を彼女が了承したのかどうか、それはわからない。

ドラマのドラマ化

この本は、アンネマリー・シュヴァルツェンバッハのサラディンにかんするジャーナリ

ストとしての著作にくらべ、個人化され、ドラマ化されている。一九三八年六月八日の手紙で出版社は写真の選択を提案し、シュヴァルツェンバッハに本文の梗概をもとめた。「ここではサラディンの多方面の登山活動を素描し、ハン・テングリをクライマックスに持っていくのがよいでしょう」

ドラマ化の意図はハン・テングリの悲劇の描写にも表われている。それについてアンネマリー・シュヴァルツェンバッハが知っているのは生存者から聞いた話だけだった。彼女の叙述によれば、サラディンは山でも下山後の最後の数時間でも凍傷を負った手でメモを書いている。「最後の読める言葉は九月一三日に書かれている。『日曜日。馬が来た。われわれは馬に乗って氷河とモレーンを越えてメルツバッハー湖の上に出た。そこでキャンプ。ヴィタリを見つける』」

しかし文書館に保管されているサラディンのノートは八月一九日にカラコルを出発したところで終わっている。アンネマリー・シュヴァルツェンバッハが言及している「サラディンの小さな赤っぽい手帳」は紛失した——あるいは、そもそも存在しなかった。ひょっとしたらこの手帳も彼女の死後、大部分の手紙や日記といっしょに母親の手で焼却されたのかもしれない。彼女自身も雑誌の記事、たとえば『アトランティス』に、八月一九日のことを、「この瞬間から彼はもうメモを付けなかったし、手紙も書かず、ハン・テングリに達すること以外は考えなかった」と書いている。凍傷の手でメモを書くのはほとんど不可能だっただろう。おそらく著者は誤った情報を手がかりに本のなかで詩的イマジネーションを駆使したのではないか。

いっぽう登山の状況に感情移入する彼女の能力は、自分自身の体験でそれを知ることはできなかっただけに、並はずれている。登山家の目で見ても、専門的あるいは技術的にミス指摘しうる叙述はほとんど見つからない。読んでみると、彼女が実際に「レンツリ」とともに山を登り、彼とともに闘い、凍傷を負い、苦しんでいるような印象を受ける。

もうひとつの知識の欠如はサラディンのアメリカ合衆国と南米での遍歴時代だ。ここでは彼女は写真アルバムと、のちに弟ペーターから聞いた話に頼るしかなかった。一九四六年、つまり彼女の死後四年経って、サラディンとともに合衆国を旅したフリッツ・モーニから、彼女の遺産管理人のアニタ・フォラーに手紙が届いた。「故アンネマリーさんはかつて私の親友である登山家のロレンツ・サラディンにかんする本『山の生涯』を書かれましたが、この版はすでに品切れになっております。この本にはいくつかの誤りと、サラディンがアメリカで過ごした時代にかんして部分的に大きな欠落があります。それは資料不足によるものであり、アンネマリーさんは私を知らず、ロレンツがあそこでの全歳月を私とともに過ごしたことを知らなかったからです」

モーニはしばらくミュンジンゲンの精神病院に入っており、年老いて病弱と称しているが、シュヴァルツェンバッハが彼にも取材したかのように、テキストを補完してもよいと申し出た。アニタ・フォラーは法的理由でこれを拒否し、かわりに復刊ではモーニの名で補完すると提案した。しかし復刊は二一世紀に入るまで実現しなかった。

モスクワでは遠征の不幸な結末に大いに動転した。英雄崇拜もソビエト型全体主義体制の本質的特徴だった。プロレタリアの出自とキャラクター、黙々と超人的な意志で目標を追求し、ソ連の未知の国境地帯を命をかけて調査し、またそれによって占拠し……というわけでサラディンは期せずして支配的イデオロギーにぴったりの存在になった。山仲間とコニー・マイヤーのような党幹部がモスクワで盛大な追悼会を催した。サラディンの友人ゲオルギー・ハルランピエフは一九三六年一〇月一七日にペーター・サラディンにこう書き送った。「舞台にレンツリの大きな肖像が描かれ、大きな写真が展示されます。晩には一五〇〇人以上のレンツリの友人が参列するでしょう。詳しくはまたお知らせしますが、レンツリの追悼会がソビエトロシアで立派に愛をこめて催されることをお約束します」。これは、その多くが粛清される前の、ソビエトロシアの登山家の最後の大集会となるだろう。

スイスではサラディンははやばやと忘れられた。機関誌『ディー・アルペン』にスイス山岳会ルセンドロ・セクションが短い追悼文を寄せ、サラディンの登山の業績を評価し、慎ましくて誠実な人柄を誉めたが、彼が不信感を抱かれ、妬まれたこともうかがえる。「ただ、ロレンツ・サラディンはめったに理解されなかった。彼の能力と行動は理解を得られず、いわんや信頼をけっして寄せられなかった—不当にも、たんに彼の信念のゆえに」

アンネマリー・シュヴァルツェンバッハはこの頑固な人間を理解しようとして、彼とともに思考のなかで旅をし、彼の思い出を忘却から救った——まさしく彼の信念のゆえに。その信念を彼女は分かち合った。生前の彼に一度も会ったことがないにもかかわらず。彼女の本は、自分自身はけっして見いだせなかった愛にたいする憧憬に支えられている。「この愛はロレンツ・サラディンの人生に首尾一貫性と強靱性を付与し、人生をハーモニックに満たし、素朴な偉大さへと昇華させた」

夢の頂にて

ハン・テングリの頂上ほどロレンツ・サラディンを近しく感じられる場所はほかにはない。頂上の状況は変わりやすい。雪は四方八方に吹きすさび、風向きは定かならず、この荒涼として人跡稀な地球の一面では季節も知らぬ間に過ぎてゆき、聞こえるのは岩に吹きつけ、雪を舞わせ、雲を岩間に散らす風音ばかり。二〇〇五年八月二三日、足もとのきしむ音で周囲の単調さを破りながら、私はロレンツ・サラディンのことを考える。目を閉じて、一九三六年九月五日を思い浮かべる。私は男たちの喘ぐ息づかいを聞き、かれらの痩せこけた顔を、擦り切れた粗末な服装を見る。霜と雪が髭にまといつている。疲労が顔に刻まれている。しかしレンツの目は頂上で輝く。最大の夢がいま成就したのだ。ついに彼は仲間とともに、長く憧れていたハン・テングリの、彼の山の、頂に立つ。精霊の王の上には中央アジアの果てしない青しかない。疲労困憊したチームがその間で休んだ二つの岩塊、ハン・テングリの雪と巨大な大理石のピラミッドは、明日も、百年後も千年後も、そこにあるだろう。しかし、この場所が残っても、すべての山が寡黙で神秘的であるように、そ

ここで展開された運命と物語は、いつまでも秘められたままだろう。ロレンツ・サラディンの生涯については、われわれ人間が語るしかない。